

# パネルディスカッション

## コーディネーター

佐藤 信（さとう まこと）

東京大学名誉教授、くまもと文学・歴史館館長、横浜歴史博物館館長。専門は日本古代史。博士

（文学）。

東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授、大学共同利用機構法人人間文化研究機構理事を歴任して現職。

## パネリスト

長谷部 善一（歴史公園鞠智城・温故創生館 館長）

石川 日出志（明治大学国際日本古代学研究クラスター代表）

亀田 修一（岡山理科大学 特任教授）

田中 俊明（滋賀県立大学 名誉教授）

はじめに

佐藤信

ただいま御紹介いただきました佐藤信です。

今回は第十七回目となっておりますけれども、ここ五年ほどはコロナの影響で東京ではシンポジウムができませんでした。昨年は熊本でコロナ対策をしながら、シンポジウムを開催させていただいたわけですが、その時も渡来系技術を話題にしました。ところが、いろいろな課題が残りましたので、今回「渡来系技術と古代山城・鞠智城」というテーマに「渡来文化の重層性」というサブテーマを付した次第です。



前回も話題になったのは、「渡来文化」と一言で言ったり、あるいは一般的に「百済系の影響を受けている」という言い方をしたりすることについての問題です。瓦については「高句麗百済系」といった名前を小田富士雄先生がつけられていて、高句麗の影響を受けた百済系統のものが来ているのではないかという御意見があります。それから、皆様御承知のように六六〇年に百済が一旦滅び、六六三年の白村江の戦いの後には百済復興軍も滅び、六六八年には高句麗が滅んでおります。その後六七〇年には統一新羅ということになり、その後は新



羅なのですよね。百済の故地はもう新羅になってしまっているわけです。七世紀の末、例えば鞠智城が繕治された六九八年の頃には、朝鮮半島はもう新羅ということになっています。で、六六三年の敗戦後に日本列島で築かれた山城の記事に、日本書紀では百済の亡命將軍の名前があるわけです。そういった形で七世紀後半のある時点以降は、百済という国はなくて新羅という国しか朝鮮半島にはないわけです。あるいは、もうちよつと前の時代を言うと、五六二年には加耶が新羅に最終的に滅ぼされておりますから、加耶の影響というふうに見るのか新羅の影響と見るのかというのは微妙です。先ほどのようなお話にあったように、朝鮮半島の山城でも、百済の時代の山城でありながらその後新羅が山城として使っていて、どちらかというと最終的には新羅の城と見た方がいいという山城もあります。重層性というのは、そういう意味での重層性があります。

それから、今日の亀田さんのお話にあったように、渡来文化にももっと多様性を見て取れるのではないか。百済・高句麗・新羅というふうに一般的に言うのだけでも、百済だけではなくてそれぞれ



の影響があるのではないか、というお話がありました。

それで今日は、その重層性や多様性をめぐって、渡来文化というのをどう捉えたらいのかということをお話したいと思います。一応目次として、第一章では、渡来文化の重層性や多様性をどう考えたらよいかというお話をいたします。第二章では、それが鞠智城にはどのように見えるかというお話をして、最後の第三章では、今後の鞠智城の調査や研究で渡来系技術についてということが分かるだろうか。研究はどういうことを目指すべきか、についてお話したいと思っています。

最初に、今日の亀田さんのご報告が、最後に時間がないために端折っていただきましたので、まとめのところだけでも亀田さんに補足していただけるとありがたいと思います。

## 亀田修一

いろいろお話しておりましたら時間がかかってしまって、すみませんでした。それでは、最後のまとめのところだけお話いたします。

まとめですが、何が言いたいかといいますと、まず山城の選地です。はじめに山城をどの辺あたりに造るかということにつきましては、百済からの偉いさんたちが来て場所を決めていると思います。

山城の外郭構造に関しましては基本的に百済に類例がありますので、それでいいのかなと思います。しかし、石垣の構造などにつきましては、明らかに高句麗的なものが入ってきています。これは多様性

の一つと思います。このような点で単純に百済とは言えないのではないかと、思っています。

それから、門に関しましても基本的には百済的なものでいいのですが、このスライドの②の門の一番下に赤で書いていますように、水門に関しましては百済と新羅の両方があり得るのかなと思っております。

内部施設の八角形建物に関しましては基本的に新羅でいいのかな、と僕は思っています。先ほど、田中さんもお話しになっていたのですが、百済では確実な八角形の建物は分かっていません。ですから、無理やり百済としなくてもいいのかな、と思います。少なくとも新羅に八角形の建物があることは動きませんので、ひとまずは、新羅を中心に考えるべきかなと思っています。

貯水施設に関しましては、韓国の中で今後調査が進めば、恐らく、日本のものと類似した土手だけで水を溜め、後ろは素掘りの貯水施設が出てくるのではないかと、思っています。

それから、瓦に関しましては、先ほども佐藤さんが紹介されたように、小田富士雄先生は高句麗百済系とおっしゃっています。ただ、小田先生は基本的には畿内経由とのお考えです。僕は、少なくとも、丸瓦が瓦当面の上だけに被っている例は近畿では分かっていますので、畿内は経由してない可能性があると思っています。そうしますと、現状では、やはり高句麗系か新羅系か。なぜ、このようにこの瓦の系譜に高句麗が付くのかといいますと、実は朝鮮半島の中で、先ほどの田中さんのスライドにもありましたように、高句麗はいろいろなものが多様なのです。朝鮮半島南部地域、つまり百済と新羅の国境

線エリアに、かなり独特のものを作りだしています。この点にしましては明らかですので、そういう意味で、ちよつとここに高句麗が入っています。そして、やはり新羅との関係が強いかと思っす。

軸摺金具に関してはよくわかりません。

まとめますと、日本列島の古代山城の技術にしましては、基本的に百済とか、どこか特定のものというよりは、多様なものが入っていると思っす。その多様なものが入る理由の一つが、新たな百済系の渡来人たちが上に立ち、それ以前の多様な渡来人たち、新羅だったり加耶だったり高句麗の人たちがいて、その人たちが地元の人たち（古くからの倭人たち）と一緒に関わるので、結果的に重層的な渡来系のもが見えてくるのかなと思っす。

こちら（本文図22）がそのモデルです。この岡山の鬼ノ城にしましては、ヤマト王権が発注者で、実際に上の方に立つのは百済の亡命將軍です。さらに、僕は最近、工兵部隊の責任者クラスも来ているのではないだろうかと思っす、これ「工兵部隊の責任者クラス」を入れています。これは、結構大事かなと思っす。といいますのは、かなり高位の亡命貴族たち、例えば日本で言う正三位クラスの偉いさんたちが、ずっと現場に張り付いて鬼ノ城を造っているのかというと、そんなことはないと思っす。ですので、実際に工兵部隊の責任者クラスも来ているのだろーと思っす。それに地元の渡来系の人たち、新羅系の人とか加耶系の人が加わります。特にこの地域は後の郡名が賀夜郡です。そして

その中に、現場監督クラスから技術者クラスまでが、重層的にいると思っています。賀夜郡、下道郡、窪屋郡、都宇郡とか、この都宇郡は港の津ですから港湾にも関わった渡来系の人たちがいる、いろいろな人たちが関わって、実際の肉体労働や資材調達も含めて、鬼ノ城を築城したのだと思っています。

筑前の大野城が築城された大野郷では、ここ十年来の調査で新羅系の人たちの生活跡や墓が見つかっています。だから、その担当者も同じように、大野城の築城には新羅の人も関わっているだろう、と考えています。このように、実際の具体的な例、岡山が分かりやすいので挙げているのですが、具体例を考えたら、いわゆる歴史的な重層性、地域的な広がりも含めて多様なものがあるという見方となります。それに、この（本文図22の）白猪屯倉、岡山の場合ですが、白猪屯倉は御存知の方も多いと思いますが、百済系の新しくやってきた王辰爾さんの甥の胆津がここにやってきて、戸籍を作ったりしています。この胆津さんは文系です。いわゆる技術者系ではありませんが百済系の人で、胆津さんたちと一緒に吉備の地に来た人たちがいて、鉄などに関わっていたという理解をしています。ということ、先ほど言ったことと同じになりますが、古代山城には、新たな百済系の将軍、技術者たち、それ以前に来ていた各地の渡来系の人たち、そして在地の倭人たちが関与して、渡来系技術が重層的に見られるのかなと思っています。

## 佐藤

ありがとうございます。大変よくわかりました。

私、どうもすぐに渡来系と言ってしまうのですけれども、五世紀代に大勢の渡来系の人達が朝鮮半島からやって来ているわけですが、七世紀代にも白村江の戦い前後に大勢やって来ている。日本書紀を見れば、高句麗からも、百済からも、新羅からも大勢の人が日本列島に渡って来ておりますし、その人達が東国に多く安置されています。今日、最初に吉村武彦さんがご挨拶で話されたように、武蔵国には高句麗から渡来してきた人々で郡を興した高麗郡こまぐんがあり、新羅郡しらぎも八世紀に置かれています。東国には高句麗系も新羅系も百済系も渡来人がやって来ています。下野しもつけに新羅系が影響力を持っていたり上野こうずけの多胡郡で上野三碑を作ったように、新羅系の渡来人が大勢いて漢字文化も伝わってきたと考えています。このように、東国を考えた場合でも、高句麗だけとか新羅だけとか百済だけという形ではない影響を在地社会に与えているのだろう、ということがあります。



また、五世紀代に渡来してきた人と七世紀代に渡来してきた人が全く同じかというと、それぞれの時代  
の大陸や半島の技術を体现しながら来ています。古代史で有名なのは、倭国に送られてきたカラスの羽  
に書かれた文書を、その時のヤマト王権の文人は読めなかった。しかし、新しくやって来た渡来人達は  
すぐ分かって、ご飯を蒸す湯気に当てて、カラスの羽に書いた文字は墨で書いてあるから読めないの  
ですけど、布帛に文字を転写してすぐに読んだという話があります。これは、古い時代にやってきた古い  
漢字文化を身につけた人達には新しい文字が読めなかった、ということを象徴しているのだらうと私  
どもは考えています。そのように、五世紀代の影響もあれば、七世紀代の影響もそれぞれありうる、こ  
のあたりが今回の重層性の問題かと思っています。

さらに亀田さんのお話を聞くと、同じ重層性でも、例えば大野城や鬼ノ城の築城を指導した百済から  
の亡命將軍のような立場の人から、現場監督にあたる工兵部隊の責任者クラスの人もしれば、その下  
には技術系の渡来人もいるし、もともといた在地の渡来系の人々もいて、さらに在地の人々もいるとい  
うような形での、ランク別というのか、そういう重層性もあり得ると思えました。

今回は、このようなことを考えたい、ということなのです。

## 一 渡来文化の重層性や多様性

佐藤

今日は、弥生時代にさかのぼって渡来系の技術の基本的なことを教えていただきました。全体のお話を聞いた上で、渡来系の技術を考える上での重層性とか多様性についてコメントをいただきたいと思いますが、順番に、まず石川さんいかがでしょうか。

石川 日出志

やはり弥生時代と古代は、もう全然違うってことを改めて痛感しますね。亀田さんが示された「備中鬼ノ城築城モデル」図、私でも非常によく理解できるものです。あの図をモデルに弥生時代の渡来系技術と在来の人々との技術的な関係、あるいは渡来系の技術や物がどう社会に普及していくかということ考えたときに、土器づくりの場合ですと、現場の作業を行う一番下のクラスにとどまる。それから一番ちゃんと根づいているのが青銅器製作技術ですけども、それも下から二番目クラスです。それもごく少数の一工人グループのレベルです。それよりも上のクラスは、弥生時代にはないと思いますね。

亀田さんの図は、システム体系のピラミッド構造で、一番下のクラスが実際の作業を行う人のレベルです。これ、土器ですとごく少数の技術伝承する人がいれば、一人でも二人でもいけば、すぐ受容できます。青銅器鑄造技術だと、やはり二番目の技術者クラスでしょうか。朝鮮半島から原料を入手する仕組

みと技術とを持って少人数のグループが入って来ていれば、根づいちやう。ですから、青銅器でもこの三番目の現場監督あたりに届くか届かないかレベル。それ以外の部門、このピラミッドの上半分は弥生時代には全く関係しない、と思います。有力者クラスは、社会の仕組みなどでは大陸と様々な交流をしますけども、技術伝承レベルでは関与しないと思います。ですからこの比較は、私としてはとても理解しやすかったです。最後に思うのは、やはり古代山城からだともこのように見事に描けるのであって、例えば都城とか寺院からだとは少し違う、古代山城ゆえに見えてくるのが、とても面白く感じました。以上です。

## 佐藤

ありがとうございます。大事なお話をしていただいたと思います。

寺院の造営などでは、礎石建ちで瓦葺きの建物の体系を初めて導入します。しかも礎石建ちの建物を建てるためには版築という基礎地業や基壇を積まなくてはいけないという技術が必要です。日本書紀にも、蘇我馬子が日本で初めての伽藍寺院、飛鳥寺を建てる時には、百濟から瓦博士とか鑪盤博士とか、そういう技術者を百濟王から派遣してもらって建てたとあります。そして、その飛鳥寺の遺跡も明らかになっている、ということがあります。例えば弥生時代の水稻耕作、水稻農耕の技術体系が、日本列島で一気に広まったというイメージもありますが、そういうイメージはどうなのでしょう。



石川

水稻耕作も、青銅器と同じように、その技術の連鎖を伝えるごく少数の設計者、技術者がいれば、大多数は地元の人達で対応可能なレベルだと思います。

佐藤

それはかなり早く広がったと思ってよいのでしょうか。私は、日本人は外から来た新しい技術を自分のものにするのは、結構早く慣れるのではないかという気がしているのですが。

石川

それができる部門と困難な部門があるのではないのでしょうか。古代の場合だと古代山城は寺院建築や都城建設に携わる人レベルの技術者だけでは無理ですよ。立体的な土木構造物は、もう無理なのではないでしょうか。

佐藤

今日、石川さんが最後の方で報告なさったような、石垣や石積みの技術などは、やはりそう簡単には倭人が受容できないと。

## 石川

石積みを立体的に構築するとしても、古墳なんかはたかが知れている。わずか一、二メートル、ずっと上まで急傾斜でも持ち上げられるわけじゃない。場合によってはそれを段築するというような程度だと思うのです。それから堅穴式石室、横穴式石室も石積みをするのですが、最後に天井石で押さえることで構造を安定させている。

しかし、古代山城の石積みを伴う土塁はそうじゃない。石垣を積み、内部に土石、版築もあるのでしょうか、それ自体の重量で保持するという、全く違う土木技術だと思うのです。古墳時代と古代では全く違うんだな、と感じます。

## 佐藤

特に山城は、築城に失敗したらすぐ自分たちの命がなくなるわけですから、ちよつと違いますよね。次に、今日の全体の話聞いた上で、亀田さんいかがでしょうか。

## 亀田

石川さんの話を伺いながら、僕は主に古墳時代以降のことをやっているのですが、弥生時代の受け入れ方の話は、「ああそうだよな」と思いました。その中で、やはり飛鳥時代とかになるとまた違うレベ

ルや内容のものが入ってくるので、今日お話しされたように、それぞれの時代に応じて入り方とか受け入れ方とかが違うのだな、と思います。

長谷部さんの話は、実は前回も伺っていて、基本的なところを話されていたので、そうだな、っていうのと、最後にちらっと話されていました花崗岩の話、僕ほとんど今日触れられませんでしたけれど、あれは実は大事な話だと思っています。僕も昔、花崗岩を少し追っつけたことがあります。高句麗は少なくとも四世紀には花崗岩を綺麗に加工する技術があります。もっと古い時代からあるみたいですが、飛鳥時代に百済から入ってきた路子工っていう人が、飛鳥で須弥山と呉橘などの石造物を作ったりするのですが、そのような百済からの技術というのはそれでいいと思います。

実は例外的に近江で石棺を花崗岩で作っている例があります。実物は見たことがないのですが、写真で見ると少なくとも石棺の内側はボコボコになっていてあまり上手くないなと思いました。ただ、渡来文化が古くから入っている近江だったらこのような花崗岩加工技術が入ってもいいのかな、と思ったのですが、やはり花崗岩加工に関しては古代寺院とか新しい段階に百済などの技術者の関係で入ったのかなと思っています。そういう意味で、鞠智城の解明には、是非とも花崗岩の研究をやっていたきたい。特に例の唐居敷を誰が作ったのかということは、とても興味深いと思っています。

田中さんのお話は、田中さんならではの写真を今日これだけたくさん見ることができて感激です。残念ながら僕は北方の山城に行ったことにはないのですが、やはり高句麗山城の圧倒的な強さを感じまし

た。昔、檀原考古学研究所におられた有光教一先生と話したとき、僕が「百済の考古学、山城などをやっています。」と言うと、「百済の山城は、高句麗山城からみたら子か孫ぐらいだね。」って有光先生に言われました。いや、本当にその通りだと思います。高句麗山城を見ている人が南の山城を見たらやはり「ん？」と思う話なのだと思います。有光先生から直接言われて「そうですね」としか言いようがなかった記憶がよみがえりました。

## 佐藤

ありがとうございます。本当にそうですね。

今ちようど話が出ましたが、今日、高句麗系の山城のうち中国や北朝鮮のようになかなか私どもが行き難いところの山城の姿を見せていただきました。私も、高句麗の山城の石垣の写真をらせていただくと、これは凄いなと思いました。金田城どころではないな、という感じもいたしました。これまでの話と繋げて、例えば花崗岩の加工技術なども含めて、高句麗・百済・新羅の石垣の積み方の違いはあるのでしょうか。今日の重層性・多層性の話と併せて、田中さんからちよつとお話をいただきたいのですが。

## 田中俊明

花崗岩の問題ということは、なかなかわたしには難しいです。

高句麗山城にはいろんな要素がすべて揃っている、と考えていただいてよいです。今回いろんな技術ごとに集めるということを経ずに、ざっと全体を見ていただくという形にしましたが、亀田さんが挙げられたような門だとかそれぞれの部分をテーマにすれば別の並べ方ができたので、それぞれの例が出せるというようには思いましたね。

花崗岩はちよつと別にして、高句麗でもある程度の切り石を積み上げるといえるのは、集安の王陵クラス古墳に使われる技術が先行すると思いますから、そうすると四世紀になります。そして、それより後に山城に使われるというように考えます。山城が先行することはない、と思うのですよね。そうするとやはり將軍塚を完成形として、それより前に築かれていた太王陵なり、集安には大きな石を何段にも積み上げた有段式の積石塚がありますけども、そういうところでまず使われていたと思います。ですから五女山城でも都として見れば別に紀元前後からこの山上を使っている。その時代を示す遺物も出ます。しかし、城壁もそうかと言うとそうではない。城壁は後になって造ったと考えるべきだと思いますから、山城を使っている時期と城壁を造った時期は一緒にしてはいけません。石築の城壁は、一番早くてそのくらいの時期かなと思います。

さらにわたしの感想というか、亀田さんの鬼ノ城の築造は六六七年ぐらいのことでしたので、要する

に滅亡時ぐらいまでの渡来人ということですよ。そして秦氏にせよ東漢氏にせよ、そもそも重層的とか複合的なので、そういう技術者がもし仕えたとすればその中にそういう技術が入っていてもいいと思います。それから後のことも考えていいのではないかと。佐藤さんは、六七〇年で新羅というふうに言うべきみたいに仰いましたけれども、唐との戦争があるのでそれを終えて六七六年に統一新羅です。統一新羅という言い方は日本だけですけれど、その時期から後にしても、別に新羅技術というわけではなくて、百済の技術もそのまま伝わっているし、高句麗系と言ってもいい、百済系と言ってもいい。だから、その後になって新羅人もやって来ますが、そのあとの重層的なことも、やはりもう少し考えてもいいかなと思うのです。六六七年で完成して、それまでに来たその渡来人の複合的なあり方が反映しているというだけではなくて、もう少し後のことも含めていいのではないかなと思います。

個別に年代も考えていけないというところでしょうから、それはこれから、もう少し細かいことに期待をしたいと思います。

## 佐藤

私、話を分かりやすくしようと思って六七六年の新羅による統一以降は新羅でいいのではと言ってしまったのですが、確かに新羅になっても高句麗系の技術はあるし、百済系の技術もあるし、伝統的な新羅もあるし、加耶系も残ってはいる、と私も思いました。

花崗岩は、人力で細工し難いほど、もの凄く硬い石ということです。私は奈良文化財研究所にいます、所長の坪井清足さんから「花崗岩の礎石を使ってる寺は格が高いんや、凝灰岩のものはそうでもない。」ということをお話を教わった記憶があります。鞠智城も花崗岩を使っているということです。今までのお話をふまえて、石垣の技術も含めて、鞠智城にも石垣が残っているところがあるわけですが、いかがでしょうか、長谷部さん。

## 長谷部 善一

鞠智城の花崗岩の使用について、まずご紹介したいと思います。最近私が鞠智城で、礎石建物で使われている石材を数えました。それが約三百個、一棟につき十二個とか十六個とかあるのですが、その総てを数えると約三百個ないといけないところが、今のところ二百個ぐらいしか残ってないのです。あとの方は、後世抜き取られたりしてちよつとわかりません。その中で礎石を石材別に分けてみますと、五割が花崗岩で二割が凝灰岩、そして一割が安山岩となり、残りはその他となります。いろんな石材が使われておりますが、半分が花崗岩、この五割というのは非常に大きな数で、これ今からもうちよつと研究を進めていきかなければなりません、時期が古い建物礎石、国（大宰府）の関与があったのではないかと言われている礎石建物には花崗岩が使われていて、その後、時代を経て八世紀以降、九世紀に近くなると多様な石材が使われる、ということが少し分かってきています。

鞠智城は、西側土塁線あたりで非常に多くの花崗岩を採ることができます。城内で一番建物群が建てられているところから数百メートルも行かないところで、今でも西側土塁線を歩くと花崗岩が露出しているところが多くありますので、そこがおそらく供給元だろうと考えています。そういったところで鞠智城を考える上では、花崗岩、さらに阿蘇を控えた熊本県北部に立地している以上はやはり凝灰岩の使用、この辺りもしっかり考えていかなければいけないかなと考えております。

石垣ですが、鞠智城にも「馬こかしの石垣」とか「三枝の石垣」があると言われておりますけれども、これらはまだ発掘調査の方が進んでおりません。今後、石材なども見ていきたいと思えます。けれども鞠智城で、唐居敷であるとか、礎石以外のところでの花崗岩の使用というのは、ちょっと私も一見したところでは見当たらないかなと思っております。

## 佐藤

唐居敷は、すべて花崗岩ですよ。三メートルも幅のある立派な唐居敷が堀切門にあり、また深迫門や池の尾門にも唐居敷があります。唐居敷の軸摺穴を覗くと鉄製品で擦れた痕跡が残っているのです、今日の亀田さんが紹介してくださった鉄製の軸受け器具があったということは間違いないと思うのですけれども、系譜がわかるかというと思います。



## 二 鞠智城から見る渡来文化の重層性

佐藤

あと、今まで鞠智城を考えるときは割と百済の影響というものを考えてきたわけです。今日の、今まで話から鞠智城を考えると、重層性や多層性というのはどう考えられるのでしょうか。百済系の金銅仏の話もありますし、あるいは出土した木簡に、おそらく菊池郡に住んでいた「秦人忍」の米の荷札木簡もあって、渡来系の人達との関係を、どのようなところで見ればよいのか。ということで、長谷部さん、ちよつと先生方に聞きたいことはございませんでしょうか。

長谷部

今日すぐ聞きたいところということまでは、私も今日すぐすぐには出てきませんけれども。

田中先生のスライドを見せていただき、その後の亀田先生のコメントをお聞きしたところ、非常に、鞠智城を考える上で「もっと自由に考えていいんだな」というふうに思いました。これまで熊本県では、百済系というところを非常に重要視して研究を進められてきた、ということがあるかと思えます。

近年、若手研究者の特別研究というのを鞠智城で毎年やっております。その中で昨年、美術史分野の若手研究者の方が鞠智城の貯水池跡から出土した銅製の菩薩立像について検討なさいました。この菩薩立

像についても多くの新たな知見が示されています。そういった意見も今後は参考にしながら、いわゆる多様な部分での研究というのをもうちよつと広めていかなばと考えています。

## 佐藤

鞠智城では熊本県教育委員会が、四十歳以下の若手の研究者の方に鞠智城を研究してください、それについては研究助成金を差上げますということで、毎年四人の方に研究費を差上げて研究していただいています。その若手研究者の報告は、毎年、素晴らしく新鮮な研究成果を挙げてくださっています。その中で前回は、美術史の研究者の方が、百済系の金銅仏と言われているが新羅系の可能性があるのではないか、ということを報告されました。これも、ちよつと多様性に入ってくるかもしれない。さて、田中さんにちよつと伺っておきたいのですが、先ほど、有光教一先生は「百済の山城は高句麗から見れば孫クラスじゃないか」と言われたのですけれども、鞠智城をご覧になるといかがでしょうか。

## 田中

百済の城では、鞠智城のように低丘陵というか、あのような感じの山城のイメージ、あまり浮かばないですね。でもさつきちよつと話していたら、ソウルの夢村土城が丘陵低いんですね。城壁を周りに

造っているんですが、かなり低いですよ、夢村土城の場合は。でも、ぴつたりと百済的な山城で、鞠智城とよく似ているなっていう感じの山城は、わたしの印象ではなかなか見出しがたいという感じがします。

## 佐藤

わかりました。百済の夢村土城とか扶蘇山城は、高句麗に攻められて落城してしまいますね。けれど、高句麗の城は落城しないで隋と唐をしばしば追いつ返した。先ほどあったように、隋や唐は皇帝自らが攻めてきたのに追いつ返してしまうこともありますよね。

## 田中

その百済自体が減んでしまいますので、おっしゃるとおりです。ただ、夢村土城については、そこから都が移っただけで、夢村土城が落城したわけではないというように見えませんか。四七五年に攻められた時の城はそれなので。

最近、夢村土城でも高句麗の遺構が確認されてきました。今、北門のところを発掘しているんですが、当初、高句麗は漢江よりもあまり南に下りてきて支配をしていない、という考え方が多かったのです。ソウルの漢江に嵯峨山堡塁というのがありますが、そういう堡塁だけ造って、南まで支配に下り

て来ていないのだ、みたいな考え方あったのです。しかし、夢村土城の中から高句麗の遺構が出てきています。発掘している北門のところから道路が見つかっていまして、南門から入ったところにある王宮推定地に向かう道路ではないかと言われています。多分これから発掘していくでしょうが、今調査しているところに連結されるんじゃないか、というような高句麗の道路が見つかっている。ちゃんと高句麗も麓に下りて、ソウル地域の漢城の平地部分を使って支配していた、ということですね。ちよつと様相が変わってきました。後から新羅も入ってきますので、高句麗はソウルを七十年ほどしか使わないのですが、そのような状況があつて、そのあともソウルは使われ続けてはいるのです。

## 佐藤

古い時代、ソウルには百済の王都があつたのです。漢江の南にあつたのですが、高句麗が攻めて来て、漢江の北の山城を拠点にして百済を追い払ってしまった。百済は王都を追われて南の方に、公州だとか扶余の方に部を移転していくという変遷がある。百済の王宮があつたソウルの地が高句麗のものになる。ただし、そのあと新羅がそこを奪って、結局新羅が強くなっていくという流れがあります。漢江に面したところにある夢村土城だとか風納土城は、百済の王城です。これについて私はちよつと落城したという言い方をしてしまったのですけれど、落城ではなくて移転していったという方が正確ですね、すみません。

### 三 今後の鞠智城の調査と研究

佐藤

さて最後に、あまり時間がないので大変恐縮なのですが、これから鞠智城の調査研究を進めていくにあたって、今日のシンポジウムを踏まえて、どのような方向の研究が望まれるか。私は先ほど、鞠智城に残っている石垣の研究をもうちよつと進めていただけるといいと個人的に思ったのですが、そういった示唆をいただけるとありがたいと思います。石川さんいかがでしょうか。

石川

私は鞠智城の調査研究に望むことというよりも、その研究を受けとめる側でしかありません。その点で私の関心は、やはり石垣技術、土塁技術、城壁技術です。これだと、古墳時代との比較とか、通時代な見方ができますので。

佐藤

亀田さんいかがでしょうか。

亀田

はい、今日一通りお話をうかがって、花崗岩の検討、これを是非とも続けて欲しいです。といいますのは、門のあの花崗岩は現地で採れたものなのか、それともどこから持ってきているものなのか。

長谷部

城門の唐居敷の花崗岩ですよね。あれは恐らくは、まだ分析までしたわけではないのですが、表面観察だけでいくならば、すぐそばの地元で採れた石材でしょう。

亀田

すぐそばで？

長谷部

はい。西側土塁線には、掘切門の唐居敷を超えるような大型の石材が地表に見えておりますので、そういうところから選んで持ってきているのだと思われます。

亀田

そうしますと、そういうところを掘れば石切場みたいなのが見つかる可能性があると思うのですよ。あれだけ大きい石材なので、もしそういう石切場みたいな場所が見つかると思うと面白い話になるのかなと、今日伺いながら思っていました。

長谷部

その可能性は非常に高いと思っております。西側土塁線の一部は、今まで版築調査の目的では調査がおこなわれていますが、花崗岩の採掘場、石切場としての目的では調査はされていけませんので、将来の調査課題として残しておきたいと思います。

亀田

もうちょっといいですか？これはもう以前から言っている話ですが、貯水池の中を掘って欲しい、これが一つ。それから、北東側の城壁線はあまりまだよく分かっていないですね。あの辺も実は、今日も田中さんが紹介されていたように、崖をそのまま使っているというのもあると思います。その崖の上に、やはり何か作っているものもあるのかなと思っています。香川県の屋嶋城跡も似た様子が見られます。そういう調査もできるのかなと思いますので、まだまだ、いろいろネタはあると思います。是非と

もその辺トライしてください。

佐藤

それでは田中さん、お願いします。

田中

鞠智城はこういったシンポジウムを継続されていますし、先ほども話題になった若手研究者に助成して、最新の研究を集めるとかなさっている。だから一番進んでリードしている、と思いますので、そういう役割をずっと果たしていただければありがたいと思います。

佐藤

なかなか今、予算も厳しい時代にはなってきているようですが。それも含めて長谷部さんいかがでしょうか。

長谷部

仰っていただいたこと、非常にありがたいと思います。今後もこの鞠智城シンポジウムと若手研究者



の特別研究、これについて私たち歴史公園鞠智城・温故創生館の存在意義の一つ、これはそれぞれ一つだと思っていますから、この二つをしつかり継続するよう取り組んで参りたいと思っています。

## 佐藤

今、石垣とか花崗岩の研究課題の話がありましたが、門の構造なども最近、報告書を目指してまとめておられると聞いたのですが、それについてちょっと紹介していただけますか。

## 長谷部

近年、鞠智城の東側の城門、深迫門の整備を目的に発掘をしました。小規模な発掘が多かったのですが、今、一旦掘るのを止めて、これまでの成果の取りまとめを始めたところです。深迫門の整備をするにあたっては、今までのトレンチを繋ぐように少し広めに調査区を設けて、門の構造などを確認する調査を最終的にはやりたいと思っています。それについては文化庁からも、最終的な調査をやるようにとアドバイスをいただいております。まず、その調査をおこない城門の位置を確定させてから、城門の整備などに移行していくと思っています。歴史公園鞠智城のガイダンス施設、温故創生館から歩いて一番近いのがこの深迫門跡ですので、皆さんに来ていただき見ていただくのにも非常に良い場所かなと思っています。

佐藤

それを踏まえて、報告書とともに、模型も作られるという話を聞いたのですが。

長谷部

今年度、文化庁の補助金をいただいて深迫門の地形模型を作っています。鞠智城の城門、深迫門の構造ですとか、土塁のとり付き方を皆さんに分かりやすく説明する方策の一つとして作っています。

佐藤

地形だけでなく、土塁だとか石垣だとか、門の構造も分かるといいなと私は思っているのですが。

長谷部

土塁とかその辺は地元模型をもとに復元することもできますので、先生方とも議論させていただきたいと思っています。

佐藤

ぜひよろしく願います。

ということですが、田中さんからはエールもいただきましたが、今回十七回目となる鞠智城シンポジウム。随分長く積み上げてきたのですけれども、先ほど申し上げた若手の方の研究助成でも、先ほどの美術史の方の報告のように、毎年フレッシュな研究成果をどんどん積み上げてくださっているということです。鞠智城は、これからも調査・研究を重ねていくということです。調査・研究の成果はこれからまだまだ注目されるものが得られるかと思っています。

今日も、私お話を伺って、まだ鞠智城で学ばなくてはいけないことがいっぱいあるな、課題がたくさんあるな、と思いました。亀田さんが示してくださった備中鬼ノ城築城モデル、ピラミッドみたいなモデル図は、どうやって説明して肉付けしていけるのだろうかということも含めて、また、できましたらこういうシンポジウムの機会を今後とも続けていただけるとありがたいと思っております。また皆様にも期待していただければありがたいと思っております。

本日は長いこと、ありがとうございます。最初のくまモンやころも君の舞台にすごい迫力があって、どうやってシンポジウムを盛り上げようかなと思っていたのですけれども、最後まで熱心にお聞きいただきました。ありがとうございます。それではこれで終わらせていただきます。ありがとうございます。